

郷土

第 12 号

編集・発行 / 宮本常一記念事業策定審議会
東 和 町



昭和54年7月12日
高知県吾川郡地川町にて
長州大工足跡調査
木村長吉翁と



昭和52年7月13日
高知県高岡郡東津野村にて
長州大工足跡調査

東和町の今昔



宮本常一記念事業
策定審議会専門部会長

米 安 晟

周防大島について

日本には大島と呼ばれる島がたくさんあります。なかでも比較的に大きい大島は、周防大島・伊豆大島・奄美大島などです。
そのなかで周防大島は瀬戸内海西部、旧周防の国にあり、山口県に所属して、大島郡と呼ばれています。

大島郡の行政区分

(一島一郡)

大島郡の行政区分は、現在、東和町・大島町・久賀町・橘町の四町に分かれています。

そのうち東和町は、明治二十二年に市町村制が敷かれて以後、家室西方村・森野村・和田村・油田村の四ヶ村でしたが、家室西方村は昭和十六年に

白木村と改称し、昭和三十年に四ヶ村は合併して、現在の東和町になっています。この町村名の移り変わりは、郷里に出す手紙の宛名の変換することによく覚えています。

東和町の集落のうち、私は「山口県大島郡東和町長崎」(やまぐちけん おおしまぐん とつわちよう ながさき)で生まれましたが、小さい頃は「山口県大島郡家室西方村大字西方字長崎」(やまぐちけん おおしまぐん かむろにしがたむら おおあざ にしがたあざ ながさき)でした。大島郡の人なら、沖家室(おきかむろ)・地家室(じかむろ)・西方(にしがた)などの地名から、家室西方村(かむろにしがたむら)と読めるのですが、知らない人には(かむろにしがたむら)とは、なかなか読みづらかったようです。

東和町について

近世初期慶長寛永時代の東和町

今から約四百年前の慶長五年(西暦千六百年)に検地が行われました。当時の東和町は、平野森村・和佐村・神浦村・小泊村・内入村・和田村・伊保田村・油宇村・西方村に分かれており、

田畑面積が細かく調査されました。

この頃は、古くからの農業のほかに、製塩が盛んに行われていたことが、記録として残っています。現在、東和中学校の運動場になっているところも塩田で塩が生産されていたと記されています。

東和町三ヶ浦(下田・長崎・西方)の盆踊りの古い歌に、

『むかしや 白木の根は あわびや



▶ 上山から西側を見た写真
東和町長崎集落

昭和の始め頃、東和町長崎の通称「上山」(うえやま)から見た下田(したた)の生島(いきしま)の写真。手前右側の松は、長崎の地蔵様の側にあった松(通称「地蔵様の松」)前方の丸い山は高山(だけさん)生島周辺は埋め立てられて、現在は陸地になっている。

さざえ 今は木の根や草の根よ

という語句があるのからすると、以前は海だったところが、干上がって陸地になったと考えられます。船越(ふなこし)の地名も、かつては陸地が現在より狭く、船越と下田の間は船を通せた(越せた)ので、船越の地名が付いたのだと、聞いたことがあります。

このほかにも、長崎のお地蔵さんの所は、昔はどろどろした沼地で、遭難



▶ 上山から東側を見た写真
東和町長崎集落

上山から見下ろした長崎集落と、後方は、森野と神の浦を望む。海が満ちているので、真宮島との間は海になっている。潮が引くと陸続きになる。

した船があり、なくなった人を吊って、建立したと言い継がれています。このような言い伝えから、かつて海だった所が、次第に隆起して陸地をなつたところがあるとみられます。

多かった人口と出稼ぎ

家室西方村はまた、面積の割に人口も多く、一万八千近い人もあつたようです。村の名称が変わつていったことと、人口の多いことは、日本の村でも目立つたらしく、雑誌などで紹介されてい



▶長浜（長崎と平野の間の海岸）から真宮島（しんぐうじま）を望む。
後方の高い山は嵩山。

る記事を読んだことがあります。

限られた土地に大勢の人が住むには余地が少なく、家を継ぐ長男でも出稼ぎが当り前のようで、大工や左官になつて島の外で働き、盆暮れに戻つて来る家が多かつたようです。

出稼ぎは日本国内だけでなく、朝鮮・満州を始め、遠くハワイやアメリカ・カルフォルニアに行った人もいて、日本で子供を教育するために、子供だけ帰す人もあり、旧制中学校の同級生に何人かいて、彼らをアメリカ帰りの二世と呼んでいました。



▶東和町長崎沖の真宮島（しんぐうじま）（満潮時）
真宮島の後方は浮島（うかしま）。

宮本常一を知る 周防大島から対馬の旅



宮本常一記念事業策定審議会推進部会長

新山 玄雄

師走に入り、あわただしさが日ましにましてくる十二月六日に、「宮本常一を知る周防大島から対馬の旅」という大それたテーマをつくつて対馬に渡つた。二泊三日の旅である。

以前から、宮本先生の歩いた土地を歩き、そこに暮らす人々に会いたいと思つていた。そして自分自身の足で歩き、見て、聞く旅をしたと思つていた。

最近その機会をもつことが出来るようになり、佐渡や四国路などをまわつた。対馬はこれで三度目である。今回は平成十三年初秋、ノンフィクション作家の佐野眞一氏のおともをして対馬を訪れた。その時も多くの人に出会つことが出来、楽しく、有意義で刺激的な旅だった。今回は同好の士五名、同行五人の旅となった。以下そのご報告である。

対馬とは

今回の旅の紀行を綴っていく前に対馬の簡単な紹介をしておこう。

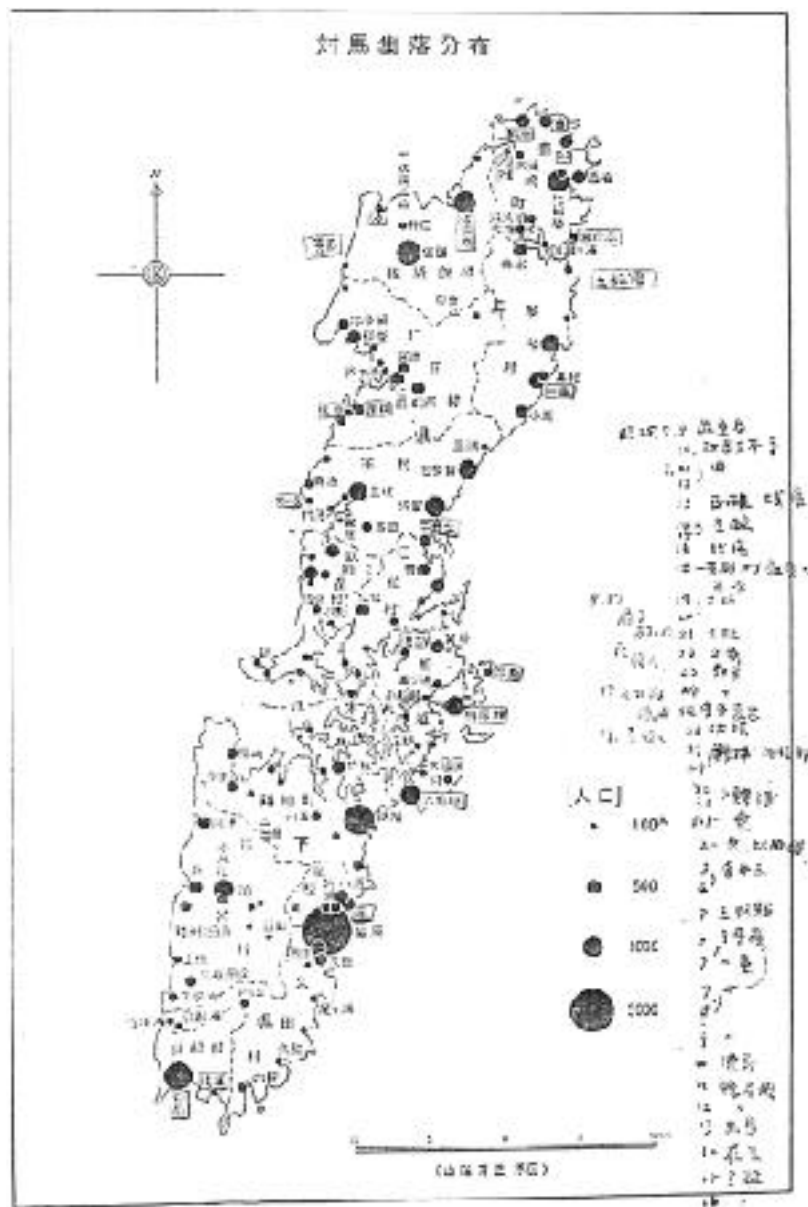
対馬は玄海灘に浮ぶ島である。朝鮮半島と九州本土の間に跳び石状に配された島々の最北端に位置して、韓国に一番近い。島の北端からわずか四九、

五キロの洋上に隣国釜山の山々が望める。一方、九州博多までは一三二キロもある絶海の孤島で、まさに「国境の島」である。

島は沖縄本土を除き、佐渡、奄美大島に次いで日本で三番目の面積を有する。南北約八二キロ、東西一八キロ、その海岸線の総延長は九一五キロにもおよぶ。大陸系の動植物が息づく雄大

な自然に囲まれて、六町に六万一千人余りが住み、豊富な海の幸と山の幸に支えられている「自然の島」である。

また対馬は、古代から日本列島と大陸の往来には欠かせない重要拠点であった。一方、国境の宿命として幾度となく外寇にさらされ、防人たちが駐屯し、国防の第一線を固めていた。日本の歴史と共にあった対馬は、独特の文化遺産が残り、私たちに日本史の源流を語りかけてくれる。史跡の宝庫で口マンあふれる対馬はまた「歴史の島」であり「防人の島」でもある。



地図に記された宮本先生自身による調査日程の筆跡

以上観光ガイドをまとめて紹介したが、何度かこの島を訪れて、その自然環境や歴史、文化とそこに暮らす人々に宮本先生が強く惹かれていったのが少しながら解るような気がする。

峰 町

― 六町合併 ―

午前十時四五分、予定どおり対馬空港におりた。すぐに予約していたレンタカー、ボンゴに乗り、峰町の対馬六町合

上 県 町

三原伊文さん

午後、一路北上し、上県町佐須奈の郵便局で三原叶也比田勝郵便局長に合流。三原さんは、大島高等商船学校の三原伊文先生の実兄で、好男子、声もはりのある偉丈夫という言葉がぴったりのナイスガイだ。宮本先生が地域に入る時、その地の郵便局長を頼ったことは有名な話だ。彼らは、その土地の

併協議会事務局を訪問。対馬も合併協議がすすみ平成一六年三月に新たな「対馬市」として誕生する。その取組みについてうかがった。「アジアに発信する歴史海道都市対馬」を新市の将来像として合併にむけて着々と進んでいる。対馬の合併の取り組み方は、いわゆる対等合併でゆるやかなネットワーク型の合併である。機能も分散し、本庁は基本的に企画と調整を行うとしている。大島郡も今、合併協議が活発になっているが、大いに参考になると思えた。

ことを最も知悉する格好のナビゲーターだった。その点三原さんは申し分ないナビゲーターであり、しかも自ら国際交流活動や地域おこしに積極的にかかわっている活動家でもあった。三原さんは「これから対馬が生きていくには、アジアと積極的にかかわりあいをもち、その交流の拠点となることが必要だ。対馬は最もいい位置にある」と力説された。対馬のもつ積極的で前向きなエートスを彼に感じた。同行のメンバーもその迫力におされて「三原さんは新たに発足する対馬市の新市長にふさわしい人だ」と絶賛することしきりだった。

柚木修さんと村山昌さん

― ツシマヤマネコの保護 ―

三原氏の案内で柚木修さん（五二）宅を訪問、氏はナチュラリストで著述家である。一昨年四月、東京から北部・上県町の里山に移り住んだ。今、国天然記念物ツシマヤマネコの保護運動に取り組んでいる。その傍ら「宮本常一が対馬に残したメッセージ」の掘り起こしを始めている。環境省対馬野生生物保護センターの獣医村山昌さん（二八）たちと一緒にその取り組みは、少しづつ輪が広がっているようだ。柚木さんが言つ。

「公共事業ばかり頼る対馬を変えないと対馬の未来はない。余りあせらずやれる範囲からはじめたいと思ってい

ます。それが一つはツシマヤマネコの保護運動であり、その運動がもたらす経済効果も考えていきたいと思っています。ツシマヤマネコと地域おこしを結びつけるのは、少々困難なことにも思えたが、そこから人とヤマネコが共存出来る仕組みを考える場と、ネットワークが生まれることは確かだ。そして、それは地域をおこしていく知恵とエネルギーを呼びおこすことにもなるだろう。これが宮本流。先の長い取組みとなると思うが、頑張つて欲しい。あとで柚木さんと村山さんの心づくしの昼食に舌鼓をうつた。対馬でとれた山の幸、海の幸はとてもおいしかった。特に猪の角煮は絶品だった。

糸瀬 博さん

—よき人と出会う—

柚木さん宅に私にとっては伝説の人というべき人、糸瀬博さん（八三）がおいでになった。氏は昭和二十五年と翌年、宮本先生が対馬調査をされた時先生に出会った人だ。現在も上対馬町文化保護審議会委員長をつとめられ、かくしゃくとしたその姿は、とても八十歳をこえたと思えない。

宮本先生に出会った時の様子をよく覚えておられ、

「宮本先生が、こちらにおいでになったのは昭和二十五年の夏でした。我が家にあった古文書を書き写していましたが、我々が珍紛漢紛だった古文書

をスラスラと読むのです。そしてその解説が見事でした。江戸時代のもので、すから、この藩の藩主は誰々で今その末裔がどこに住んでいるといったことを話すとすから。学者なら藩主の名前ぐらい言えるかも知れませんが、その子孫がどこでどうしているなんてことを世間話のように話すとす。最初は少々うさんくさい学者くずれのように思っていました。そのうち神様のように思えたのです。いっぺんで尊敬するようになったとす。それで多くの人に先生の話を聞いてもらおうと思い、村人を呼んで話しを聞かせてもらいました。本当にいい話になる話でした」

その出会いが今日の糸瀬さんをつく



▲左端より柚木さん、三原さん、糸瀬さん、右端が村山さん

っている。もちろん宮本先生もすばらしいが、その出会いをかけがいのない出会いとして大切にしてきた糸瀬さんも共にすばらしい。

対馬は広い

佐須奈を後にし、対馬北端の鰐浦へ。韓国展望所から、韓国を展望するがこの日は曇りでよく見えない。この沖で日露戦争の日本海海戦があった。途中東郷平八郎の記念碑などを見学し、比田勝をとおり、一路南下。夜になりあたりの景色は見えず、ただ延々と道が続く。ホテルのある美津島町に着いた時はホッとした。やはり対馬は広いと痛感した。

浅藻へ

梶田富五郎翁と味木さん

翌朝、対馬の最南端の浅藻（厳原町）へ。そこには、あの「忘れられた日本人」の中でも出色の「梶田富五郎翁」の末息子、味木さん（八〇）さんがいらつしやる。

もともと浅藻は、明治八年、久賀の漁民たちが住みつけたのが始めだ。この地は天道法師の住む聖地で人が住むことは許されない土地だった。その地へ、久賀の漁民たちが、「あたりがあつてもええ、それに生き神様の天子様が日本をおさめる時代になったんじや

ら、天道法師もわしらにわるいことはしまい」という理屈をたてて住み着いたのだ。その後沖家室の漁民たちも数多く移住し、無人だった所には百戸ほどの家が出来、紀伊の国から年七。はいものブリ釣り船が来るようになって、港は活気づいた。

しかし現在は、漁もへり、かつて活況を呈した浜も寂しくなつたようだ。「若い人のほとんどは九州や本土の方に出行くとすよ。年寄りばかりが残つてもつた」と味木さんがあつからかんとして言う。味木さんにお会いするのはこれで二度目である。やさしくあたたかな人柄で愛情があふれてくるような人だ。カンコ口もちを焼いていただき、しばし富五郎翁の話で盛り上がった。

味木さんも宮本先生が訪れた時のことを克明に覚えておられる。

「宮本先生も山口弁まるだしで、おじいちゃんも山口弁まるだしで二人とも長いこと話しとられました。お茶を飲んだだけで一日中ですもんね。ようあげに話があるもんと思つたとすよ」宮本先生と富五郎翁の二人が、お茶だけで時のたつのも忘れて話し込んでいた姿が目に見えるようだった。

昭和二十五年に当時八二歳の富五郎翁が語るその話は、教科書にも掲載された。それだけの価値のあるものだからだ。

最後のくだりの

「やっぱり世の中で一番えらいのが人間のようでこいす」というさりげない言葉は、すごい。そしてその語りは、

久賀と沖家室の漁民が開いた浅藻の集落と漁港
右上は梶田富五郎氏



いや味の無い、ごく自然なものだ。こんな味はなかなか出てこない。静かな迫力に満ちている老人のこのライフヒストリーはなんとも魅力的だ。

かつて梶田富五郎のような人がいた。名もなく、貧しく、けなげに生きてきた人々がこの日本列島には数多くいたのだ。古老たちの話を聞くなかで宮本先生はその人がもっている悲しみや苦しきも併せて感じとっていたのだと思う。ただの元気老人ではなく、そこにいくばくかの哀感をただよせながら展開されるこの老人の一代記が胸をうつ

つのは、そこに宮本先生の人間の営みに対するやさしいまなざしがあるからだろう。

現代の梶田富五郎はどこにいるのだろうか。そんな思いがしきりにした。

梶田家をあとにし、沖家室出身の松原徳義さんと大谷清さんにお会いした。

その後、浅藻小学校跡地に立つている開港記念碑の前で記念写真をとった。

浅藻の小学校も廃校となった。かつては多くの子供たちの歓声に満ちていたこの場所は、今は校舎も取壊され原野となっていた。ただその開港記念碑だけが当時の面影をしのばせてくれる。

跡地に立つて、私は、この地で生きそして死んでいった人たちのことを思った。そして、声にならない声で祈りをささげた。

浅藻を後にして、厳原にお住まいの民俗学者永留久恵（ハニ）さんを訪ねた。この方にお会いするのも今回の旅の目的の一つだ。上品な物腰の奥様が

永留久恵さん 歴史と民俗

出迎えてくださった。永留さんにお会いするのは初めてだが、丁寧に対馬の歴史と民俗のお話しをして下さった。全てご紹介すればいくら紙面があっても足りない。

印象に残った言葉だけを紹介したい。

「対馬は、海を開いて外と交流した時代は明るく、海に閉じ込められ島の

中に閉塞した時代は暗い」含蓄のあるその言葉が忘れられない。これは我周防大島も同様のことが言えるだろう。島の輝きを取り戻すには、これからはさらに海を生かすことが大切になると思う。

対馬コミュニティ カレッジ研究会

永留さん宅を辞し、五時から予定されていた対馬コミュニティカレッジ研究会に参加した。場所は厳原の醴泉院（安藤良俊住職）。講師は岩重慶一（東京水産大学客員教授、県内各地より四五歳以下の若者が約三〇名ほど集まっていた。

この会は、対馬を幅広く見ようという視点にたつて、対馬の地域振興、自然保護に取り組んでいる人の勉強会だそう。

もうじき対馬も合併して対馬市となる。対馬を一つの単位としたものの見方と行動が必要な時である。その時期に民間の横断的な学習と実践の場をこのカレッジでつくるうというのだ。これも宮本流が。

このカレッジは今春大島で講義が再開となった周防大島郷土大学の精神にもつながるものがある。

「地域はそこに住む者が自らつくっていかないかぎり、決して良くなることはない」とは宮本先生の口癖だった。対馬にもその意吹があり、地域の課題に取り組んでいこうとする若者がいる。今秋には、「離島振興法再考」宮本常

一が対馬に残したメッセージ」としてシンポジウムや出版も企画されている。この輪がさらに広がっていくことを願いつつ、醴泉院をあとにした。

対馬をたつ

十二月八日、風が強く飛行機の航行が心配されたがどうにか飛び立つことが出来た。

超ハードなスケジュールで精力的に人に会った。まさに歩く、見る、聞く旅とはなった。貴重な出会いがあり、心に残る言葉もたくさんあった。旅は道づれという同行の仲間も最高だった。

これからも機会を見つけて宮本先生の足跡をたどりながら、多くの人との出会い求めて旅をしたいと思う。周防大島の地から、宮本先生の世界を知る旅を続けたいと思う。その仲間がふえることを願っている。

余話

一月三十日は、宮本常一先生のご命日、水仙忌として法要と偲ぶ会が西方の神宮寺であった。その場に、対馬から柚木さん、村山さんとお仲間が参加された。この会には東京、長野、京都、大阪、神戸、広島それに山口県各地から多くの宮本ファンが参集した。少しづつ宮本先生をご縁とした交流の輪が広がっている。

演題

いまなぜ「宮本常一」か

一九九・十一・十三 成城大学

帝塚山大学学長 岩井 宏 實

南方熊楠・渋沢栄一・渋沢敬三

戦後の「列島改造」と「高度経済成長」のもたらした大きな社会問題として、昭和六十年代から環境破壊が著しく進行した。そうした状況の中で南方熊楠が再評価されるようになった。熊楠は神島の自然を守るために、神社合祀に反対した。熊楠の神社合祀反対は、合祀されて村々の神社が廃絶されることによって、鎮守の森という生活環境が破壊されるといことから、環境破壊から村々を守るということにあたり、そのため奮迅の努力をしたのであった。

この熊楠を戦後いち早く評価したのがほかならぬ渋沢敬三である。昭和二十六年に『南方熊楠全集』が出版されたが、これを出して熊楠を世界に知らしめようとしたのが敬三であった。その全集の巻頭において、敬三が長い序文を書いて、「わが国に生まれた自然、人文両面に渡る既成の頭脳の産物を広く世界に映じて願う心持ちである。」としている。この時期に全集を出すのは大変難しい出版事情であったので、敬三が物心両面にわたって尽力したことによって、熊楠

は世に知られ、環境問題の沸き起こる中で評価を受けるようになったのである。

続いて平成の時代に入ると、渋沢栄一・敬三が改めて評価されるようになった。それはバブルが崩壊した時期における日本の世情に対する庶民の怒りが噴出してきたためである。ことに日本の実業界・金融界が世情をにぎわせているように、利潤追求をもっぱらとし、悪徳と考えられる様々な行為によって社会を混乱に陥れているとき、栄一の経営理念にもう一度戻るべきであるという庶民の理性によるものである。

栄一は日本の近代化に信念を燃やし、まず資本主義を確立しなければならぬ。そのためには金融機関を整備して、国内の富を集積しなければならぬが、それは単に富を一ヶ所に集積するのではなく、集積した富を配分することによってひとが皆平等に恩恵を受ける社会にしなければならぬ。その基本になるのが金融機関であるとして、第一国立銀行を設立した。そして、社会の発展と人々の生活に潤いをもたらすのに必要な様々な会社を興した。

それは単に利潤を上げることではなく、経営の理念として「士魂商才」

を唱え、一九一六年「論語と算盤」という書物を書いている。このなかで、論語と商売は決して相反するものではない。「武士道すなわち実業道なり」といい、仁義・道徳によって商業の実をあげなければならぬというのである。そして実業人は単に経営の安泰だけでなく、高度の知性を持ち、得た利潤を社会に還元しなければならぬと努力したのであった。

そして、今日の言葉でいう国民外交、国際親善、世界平和の推進に努力した。また、社会の倫理を厳しく唱え、社会倫理の確立に努力して教育にも力を入れた。実業教育の制度が生まれたのは栄一の力によるものであり、女子教育の進展も栄一の力であり、学術文化に対しても積極的に助成をすすめた。栄一の考

えはとにかく実業界の道徳水準を高めることにあり、「日本資本主義の父」というだけでなく、日本資本主義の知的水準を高めたのであった。ここに今日、栄一が再評価される理由があるのである。

敬三はまた「祖父の後姿」という文章を書いているように、栄一の生き方を見て育ち、実業界に高い知性を導入するという祖父の考えかたをそのまま継承した。敬三は戦後すぐ日銀総裁から大蔵大臣になり、陣頭に立って日本経済再建のために様々な努力をした。新円の切り替えを行い、財閥を解体した。また、自らの渋沢財閥も率先して解体し、財産税も創設した。そうすると渋沢家も膨大な財産税を納めねばならないが、三田綱町の邸宅を物納して

ふるさとの家、ふるさとの人



宮本家から南へ出るガレンギ（図）と名所
昭和32〜33年（1957〜58）



山口県大島郡新井町下宮本家
昭和32〜33年（1957〜58）



ふるさとの風景（左の夕景）
昭和2年（1927）



熊本の山で子供たちが遊ぶ。沿岸の改修工事により砂浜は増えた。
昭和32〜33年（1957〜58）



祖母・おね、77歳
昭和2年（1927）



祖父・お五郎、81歳
昭和2年（1927）



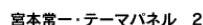
【富士一帯】最盛にもう一度来た後で、山手側の宇屋を焼くとする所しきもあつた。大正11年（1922）2月



大正3年（1914）の家と熊本の記念写真

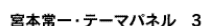
え方、戦後日本の復興に対する意気込み、そして取り組み方が現われている。

昭和初年の東北大飢饉の際、洪沢家は十和田地域の膨大な原野を農民から買い入れてその生活を助けたが、戦後農地改革に関連して、その土地を東北地方の振興に当てようとした。そして、原野に自生した立ち木を処分してその利益を東北経済復興に当てた。その振興策として昭和三十年五月号の『文芸春秋』にも敬三が書いているが、『日本が世界の観光国家となるために、観光地として立派なものにしなければならぬ。そのために、まず博物館がよいのではないか。観光地は道路を良くすることも必要だが、個人の力ではできない。国立公園が各地に出来ているが、そ



の土地の特色を出した博物館はまだ出ていない。それを作るべきである」といい、そこで作られたのが、十和田科学博物館と小川原湖民俗博物館であった。敬三は観光を「文化としての観光」として位置付けていて、その観光を事業の面で推進したのが栄一の書生であり、敬三の秘書を勤めた杉本行雄である。学問として継承したのが他ならぬ宮本常一で、彼は日本観光文化研究所を設立し、その所長となつて多くの弟子を育てた。

敬三の世界観は文化を核とした国家形成、文化を通して国際相互理解を深めるということであつた。敬三は実業界に入つてすぐ、ヨーロッパに赴任したが、銀行マンとして金融界の実態をつぶさに見ることはもちろん、それに



もましてヨーロッパの博物館と文化を深く理解してきた。岸内閣の藤山外務大臣によって移動大使に任ぜられ、南米の国々を回るが敬三の見てきたのはやはり各国の文化であり、文化をもつて世界をつなぐという思想の現われであつた。今日の実業人では到底考えられない世界観であり、それが現実今日の社会で人々が望むところから敬三が評価されるようになったのである。

渋沢敬三に続く宮本常一

栄一・敬三に続いて、今日、宮本常一に人々は熱い眼差しを注ぐようになってきた。それは列島改造以降の地域乱開発による地域社会の環境・景観の崩壊



大正10年(1921)、宮本常一が中心となり設立したアタック・ミュージアムは、昭和7年(1942)日本民俗文化研究所と改称、写真は昭和47年(1972)10月25日に浜津町で行われた北沢記念会(浜津三先生遺著記念出版「日本の民衆」全4巻) 65巻



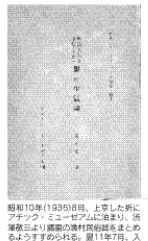
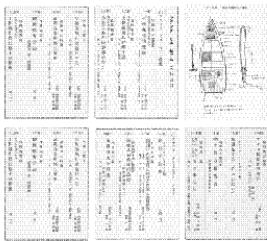
宮本とアタック時代の研究者、横田三郎(左1番)、昭和30年(1955)5月浜津町



昭和20年代(戦後まもなく?) 浜津三を囲んで



昭和10年(1935)、浜津三三郎(左)の授け



昭和10年(1935)8月、上野に新にアタック・ミュージアムに集まり、浜津三より民衆の資料民衆館をまとめるよう指示される。翌11年7月、入所館であるが、アタック・ミュージアムより出版、初版発行。28巻



浜津三の授けで民衆に民衆館へ、昭和30年代末と推定される。

宮本常一・テーマパネル 4

洪澤敬三・日本常民文化研究所

補助金ばら撒き政策による庶民の自立心の喪失、偏差値重視教育による青少年教育の退廃をはじめ、あらゆる社会矛盾が噴出してきている状況に不満と憤りを感じる人々の心情から、教育者・学者として社会の諸問題に対応した宮本常一の人と学問に惹かれるからである。

常一は大阪府下の小学校教員時代、校外授業と作文教育に重点をおき、体操や音楽・図画の時間には児童を校外に連れ出し、日曜日なども児童といっしょに野外を歩きまわり、その中で見て感じたことを作文させた。そこで調べる喜び、それを綴る喜びを得させ、体験を通じて覚え、身につける教育をし、そうした体験から児童が自分の潜在能力を知り、個性を伸ばしていったのである。こうした教育

が今日求められているところであり、それを昭和初年に実践していたのであった。そして常一は近隣の教員の同士たちと綴り方教育を実践し、指導的な役割を担っていたのである。これも戦後の無着成恭の綴り方教室よりもはるか以前のことで、その先駆けをなすものである。

常一はまた、昭和十二年に『とろし』という冊子を出している。それは当時勤めていた大阪府泉北郡(現・高石市)取石小学校の卒業生のために印刷して贈った郷土誌である。『とろし』は地名・校名の「取石」である。半紙・半版一三六ページの冊子で、村の略史・村のしらべ・昔話と伝説・我らの生活からなり、村の略史は常一自身が村の歴史の概観を書き、村のしらべは共通

離島振興協議会

の項目を決めて児童にそれを調べて来るように課したもので、また児童によって特定の問題をより深く調べてこさせた。この冊子には、本書は大阪府泉北郡取石村の小学校六年生児童調査による村の生活史である」と書いている。

常一はまた、紀州で剪定の名人に会って剪定のコツを聞いたとき、その人は「わしがみかんの木の前に立ったら、枝の方から『ここを切ってくれ』というおる。わしはそういわれるままにきつちやるだけや」といった。教員もこれと同じで、子供の気持ちの見える教師にならねばならぬと常一はいつも話していた。

昭和二十四年の八月に五日間にわたって大阪市平野区長吉小・中学校の教員・父母の講習会で話した内容を、『村

の世活とコミュニティスクール』としてまとめているが、この書物のはしがきで、「教育とは社会秩序に従って行くのみの人間を作る事ではなく、社会意思を真に読みとって社会の赴く方向を発見し、その方向に向かって進む人間を作る事である。社会思想は、社会が過去に歩んできた道を明らかにしなければ、之を知る事は出来ない」といい、さらに「教育の任務は現在に連なる前代の生活習慣へ服従させることではない。現在の生活に現われた矛盾を打ち破ってゆくためのものでなければならぬ」と訴え、ここに民衆教育の方向を打ち出したのである。これはまさに現在の教育に求められている問題である。常一は戦争中の奈良県立郡山中学校教員時代、昭和三十九年からの



昭和38年(1963)10月31日、離島振興10周年記念が行われ、横に撮影した45、(右端右から)宮本常一、山下元一、海野正三、山本公平に、横田三が贈呈された。



大分県豊後高田のくまのぼり(豊後高田の民衆館)に、離島振興協議会から参加。大分県、今泉光(京橋中央)発行。昭和38年(1963)6月・55巻



宮本常一・テーマパネル 5

調査地寸景

武蔵野美術大学教授時代も一貫してこうした理念で弟子を育てたのであった。太平洋戦争の最末期に常一は大阪府に招かれて、戦時食料補給の責任者となったが、ひとりで自転車に乗って大阪府下の村々を連日まわり、生鮮食料補給のために農民一人一人を信じ、その心に訴えて協力を得て成果をあげた。敗戦を迎えてからは、食料の自給・配給対策に専念するが、戦災に遭った人々を北海道の原野の開拓に送ることとなり、常一は二十人ばかりの人たちを引率して渡道した。ここで現地の状況をつぶさにみてそこから自分の学問の現実社会への生かし方を学んだという。

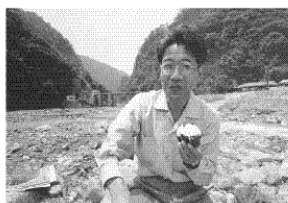
九州に至る各地の農村で農業技術の改良、農業経営の指導と生活改善運動を行った。農業技術の指導では栽培原則から稲・麦・サツマイモ・ミカン・ブドウ・蔬菜など、あらゆるものにわたった。農村からさらに山村に及び、山村生活の遅れをみて山村行政推進の必要性を知り、山村生活の経済実態を明らかにする活動を行った。それは用材・薪炭材・パルプ材・林業経営・樹苗・経営の利回り計算・植林・森林組合・林業労務から山村の組織と構造まで多岐にわたるものであった。そして、これまでの調査は村人たちから一方的に奪う調査が多いが、本当の調査というのはそうではなく、村人たちとの交流の中にあり、それが政治や行政に生かされることが

大事なんだと、山村生活者の代弁者としての具体的・積極的な実践を行った。こうして各地の調査を行う中で、山村もさる事ながら、離島の生活の遅れと困難をつぶさに見出し、なんとかしてその振興策を講じねばならないと、昭和二十八年、全国離島振興協議会が設立されるや、その幹事長、さらに事務局長となった。常一は離島の抱えている問題としてはまず、飲料水の確保が必要であり、次いで、道路の整備と殖産であるとし、伊豆七島や五島列島・種子島では具体的な改良方法を指摘し、佐渡にわたっては八珍柿の栽培をひたすら説いて周り、見事にそれを特産化した。これも「調査研究は社会構造や経済法則の発見のみに力を注ぐのではなく、調査地

の人たちの幸福を祈り、その人たちのもつ可能性の発見に努力せねばならない」という常一の理念の具現化であった。こうした強固な理念に基づいた社会的活動の中から常一は新たな学問の方向を打ち出した。それがほかならぬ日本民衆史の構築であった。この民衆史は自らの置かれた自然条件・社会条件のなかで黙々と生活を切り開き、営みつづけてきた人々の生活史であり、そこには農民・山民・漁民あり、諸職・諸芸人まであり、彼らのなかには計り知れない知恵と生活倫理があった。それを浮き彫りにしようとするものであった。常一は「忘れられた日本人」の「あとがき」に「一つの時代にあつて地域によっていろいろの差があり、それ

観文研・あるくみるきく

※観文研・日本観光文化研究所



高野東天(和歌山)の河原で、大きなニギリメシをほつばる。昭和30年代(50歳代?)



鹿嶋半島を大宮でリノックを狩る。昭和35年(1960)5月・53歳



昭和25年(1950)7月、日中交流会の村組調査に前哨戦として参加し、主に農業調査を行った時の写真と思われる。42歳



昭和44年(1969)8月・62歳



昭和50年(1975)8月・68歳



昭和50年(1975)、東アフリカのケニア・タンザニアで民族文化調査を行う。海外での調査は初めてで、大きな成果を挙げた。68歳



昭和51年(1976)10月・69歳



昭和52年(1977)10月・70歳

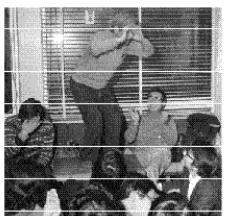
宮本常一・テーマパネル 6



新潟県古川町山田村。昭和45年より12年間に渡り調査研究。生活の遅れから民衆意識の醸成、さまざまな教育などの活動に協力した。昭和48年(1973)11月・63歳



物質文化の研究は、写真台帳を手に分析することが多い。宮本常一は、宮本大蔵(大蔵)の蔵の中にその蔵の歴史があるからである。常一は宮本の蔵からその蔵の歴史を学んでいる。昭和43年(1968)6月・59歳



昭和48年(1973)12月22日・66歳



昭和47年(1972)10月19日・あるくみるきく12月号の撮影会

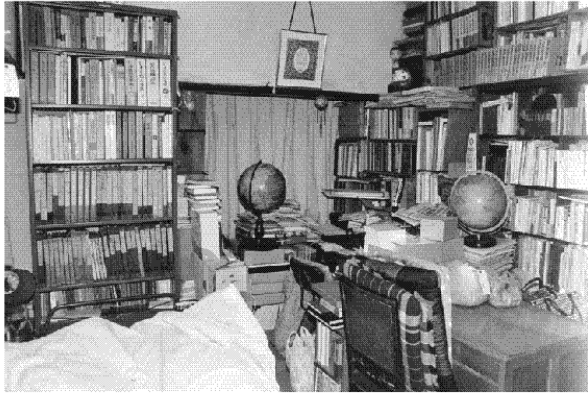


「あるくみるきく」は1冊ごとにテーマを定める総題形式の月刊誌で、昭和42年(1967)3月から昭和53年(1978)12月まで21年と101号に達し、2013年に絶版となり発行停止した。昭和53年



東京に招かれ始める。その中で山田の調査、つまり里山の調査が盛んになっていく。そうして宮本常一の蔵となる蔵の歴史が明らかになっていく。昭和53年

宮本常一・テーマパネル 7



書齋と原稿 書齋はいたるところ本棚となっていた。右手本棚の下段に読書や研究で集った書物の原稿、左手は本が一冊に並んでいる。上段は雑誌や新聞に生かされた「郷土」の原稿。右の棚には5冊置かれた生活学の資料、2つある地球儀は、どう使い分けておられたのか聞きもした。

書齋と原稿

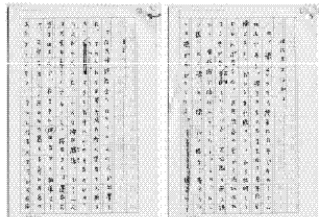
をまた先進と後進という形で簡単に割り切つてはいけなかったのではなかつたか。また我々は、ともすると前代の世界や自分たちより下層の社会に生きる人々を卑小に見たがる傾向が強い。それで一種の悲痛感を持ちたがるものだが、ご本人の立場や考えかたにたつてみている。これが必要ではないかと思う」と述べている。これが常一の民衆史の一つの核となつていく。そして、社会の進歩の中で失われて来つつあるもの、その中に人間にとつてかけがえのないものがあるとし、それを掘り起こすことによって民衆史を体系化しようとしたのであつた。

こつした民衆史の構築のためには、なんとしても民衆が「生活の必要から技術的に作り出した身近卑近の道具」が常一にとつて欠くべからざるものであり、民衆を通して民衆の生活史を浮き彫りにしようとしたのであつた。そこに常一の民具研究があり、『民具学の提唱』があるのである。いずれにしても、常一の学問は旅の学であり、実践の学であつた。

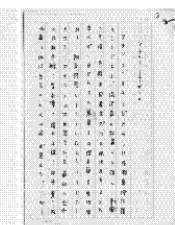
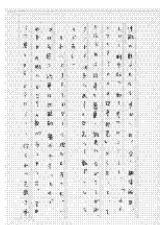
いま、常一の学問と実践を振り返つてみる時、これほど社会的矛盾に対して立ち向かつた教育・学者、それも単なる階級史観ではなく、人々の個人としての、また共同体としての生き方を真剣に考えて提言し、実践した人物はなかつたであらう。かような人物がいま現れないかと人々は期待しており、常一に対していま現に静かなブームが起こりつつあるのである。



常一の学問と実践を振り返る。常一の学問と実践を振り返る。常一の学問と実践を振り返る。



昭和64年(1979)3月17日より、読書新聞で連載が始まった「民具学」の原稿。実際の原稿紙とは異なる。写真は第1巻、第2巻の原稿の1頁目。72巻



読書新聞の連載「民具学」原稿。第2巻の原稿。

宮本常一・テーマパネル 8

宮本常一先生の本を 読む会が発足

宮本常一先生の本を読む会が発足しました。その発会式が昨年九月八日に開催され、役員選出や会則の制定、年間活動計画等が協議されました。また、発会式では民俗学者、印南敏秀先生(愛知大学教授)による「宮本先生の本を郷里でどう読むか」と題して講話も行われました。現在会員は六十名。



★お問い合わせ等★
会長 高田壽太郎さん(長崎)
0820-78-0358
事務局 松本昭司さん(沖家室)
0820-78-2163

周防大島郷土大学の 講義を開催



佐野眞一先生の講義

今年一月三十日に周防大島郷土大学の講義が、町総合センターで行われました。講師はノンフィクション作家、佐野眞一先生で、テーマは「宮本常一のメッセージ」。講義後、フォーラムも行われました。

★お問い合わせ等★
東和町教育委員会 社会教育課
0820-78-0700
メール touwaky@proof.ocn.ne.jp

—建設が進む 文化教育交流促進施設—

昨年3月に着工した文化教育交流促進施設の工事が進んでいます。この施設は東和町出身の民俗学者、宮本常一先生の資料等の展示室や、体験学習室(図書室)を主体とした交流施設で平成15年度末完成、平成16年度開館の予定です。



各室利用計画

